

桂川甫周訳并模犀図について

松 田 清
益 満 ま を
勝 盛 典 子

〈Summary〉

In the 1770s and 1780s, rare animals and plants like rhinoceros, narwhal, bird of paradise and rose of Jericho are the object of curiosity and natural history study for the interpreters in Dutch at Nagasaki and the scholars in Dutch studies at Edo. Kiyoshi Matsuda, first author of this article has discovered a picture of rhinoceros copied on the 9th May of the 2nd year of Tenmei, i.e. 19th June 1782, by Katsuragawa Hoshū (1754–1809), medical doctor of Tokugawa family, with his handwritten explanation in kanbun. The picture belongs to the natural history collection of the Yamamoto family's school (1811–1903) named 'Dokushoshitsu' (literally: reading room), at Kyoto.

The Dürer's rhinoceros (1515) was reproduced in the illustrations or plates of the Dutch books imported to Nagasaki during the second half of 18th century, like Jan Jonston, *Beschrijving van de natuur der viervoetige dieren* (1669), C. Plinius, *Des wijdt-vermaerden natuurkondigers vijf boecken*. The latter was well known in the 1770s among the interpreters at Nagasaki, like Matsuura Genkō, Shizuki Tadao, but remained unknown among the scholars at Edo. From his own copy of the first, now held in the Aijitsu Library at Osaka, Katsuragawa Hoshū copied in large-scale the copper-plate of rhinoceros and added on the top margin of the picture his translation in kanbun of the article 'Rhinoceros' of J. J. Woyt, *Schatkamer der geneesen natuurkundige zaaken* (1766, 2nd ed.).

By analysis of the translation in comparison with its original Dutch text, we proved that Katsuragawa incorporated the part of rhinoceros' battle with elephant from the article 'Cornu Rhinocerotis' of the first edition (1741) of Woyt and also consulted the description of rhinoceros in F. Verbiest's *Kun yu wai ji* (1672).

は じ め に

江戸で蘭学が勃興した安永天明期は、海外の文物収集に拍車のかかった時代であった。なかでも珍しい海外の動植物鉱物の標本、博物画、それらの銅版図版の入った博物書、旅行記は、蘭癖大名のみならず地域、階層を越えて、争って求められた。長崎の阿蘭陀通詞や草創期の蘭学者達は未知の博物情報を得ようと、未熟なオランダ語力をかえりみず、新着のオランダ語薬物辞典や百科辞典の解説に努めた。リンネの弟子 C.P. ツンベリーの来日（安永4年8月14日長崎着、安永6年10月23日離日）は日欧の同時代的な博物ブームが連環をなす契機となった。その連環

の中心にいたのが將軍家侍医の桂川甫周（1754-1809）であった。

山本読書室は日本の本草博物誌を大成させた小野蘭山（1729-1810）亡き後、京都でその学統を継いだ山本亡羊（1778-1859）が創設した本草漢学塾である。山本読書室旧跡に伝わった資料のなかから、桂川甫周が模写し訳説を付した犀図が出現した。本稿はこの犀図について、その伝来、図と訳説の典拠、翻訳過程を解明し、日欧博物交流史の研究に役立てようとするものである。

1. 犀図の発見と伝来

岩倉家旧蔵

問題の犀図は山本読書室資料の目録作成作業中、2012年8月11日に亡羊の孫にあたる山本復一（号鴻堂、1840-1912）の旧蔵資料から発見された紙本着色の肉筆画である¹⁾。薄い雁皮紙に画かれたこの犀図は発見時には幾重にも折りたたまれ、「犀 写生 山本復一蔵」と墨書した厚紙の帯で巻かれていた（写真1）。帯に捺された「鴻堂」印は復一が愛蔵品に用いたものである。

展開した犀図の紙本の寸法は縦80cm、横117.5cm。写真2は発見当時の状態を伝える。現在は新たに軸装されている。図の右上と犀の頭部の下には「巖倉圖書」との朱印（円印、写真3）が認められる。本図が復一の愛蔵品のひとつであったこと、復一が慶応3年12月から岩倉具視の秘書となり、岩倉（明治16年没）の晩年まで仕えた経緯を踏まえれば、本図を岩倉家旧蔵品と判断して間違いないただろう。

海に見える杜美術館所蔵『岩倉具視関係史料』所収の「151 桂川甫周書簡写」²⁾は、現物を調査した結果、甫周が犀図の上部に書き入れた漢訳犀説と同筆であり、甫周の自筆草稿であることが判明した。この草稿（写真4）も犀図とともに岩倉家に伝来したものにちがいない。

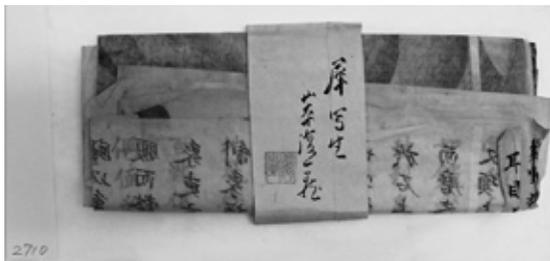


写真1 「犀図」発見時状態写真



写真3 「巖倉圖書」朱印

岩倉家でこの犀図を入手したのは、岩倉具視の祖父で画を能くした岩倉具集（1778-1853）か、あるいは本草趣味のあった養父岩倉具慶（1807-1873）と推測される。具集は竹内式部が弾圧された宝暦事件を語り、16歳の具視を尊王思想に目覚めさせたことで知られる。山本家読書室資料には具慶の描いた神農図や「具慶痘瘡到来覚」「具慶童子瘞埋之記」（文政8年7月5日出門）

などの長帳があり、山本家と岩倉家の交流関係がうかがわれる。

読書室物産会目録（整理番号 2363，文化 5 年～慶応 3 年，全 49 冊）の各冊の巻末にときどき記録されている来客名簿には、岩倉宰相中将すなわち岩倉具集の名前が文政 12 年 5 月 10 日，天保 3 年 5 月 24 日及び同月 29 日，さらに天保 5 年と天保 8 年の計 4 回現れる。犀図が具集の旧藏品であるかどうか，岩倉家と桂川家との関係も含めて，今後の課題としたい。

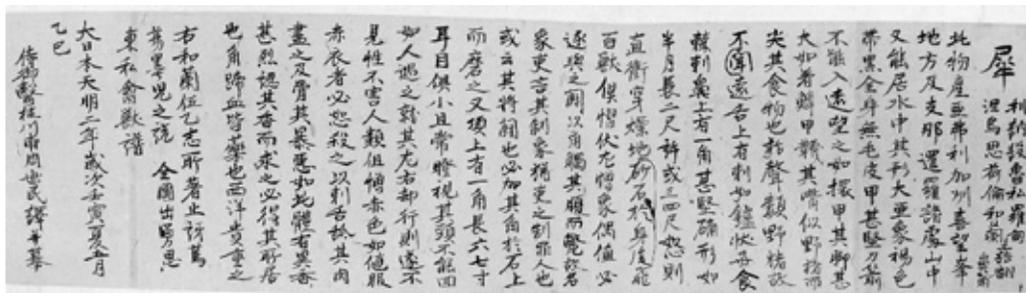


写真 4 桂川甫周漢訳犀説自筆草稿 縦 16.8cm 横 65cm 海の見える杜美術館蔵



写真 2 「犀図」軸装前

博物収集の流れ

安永天明期から化政期にかけて、犀は一角や駝鳥、風鳥、安産樹（含生草）などともに、熱心な博物収集の対象となっていた。蘭癖大名の雄島津重豪（1745-1833）の収集した動物標本を描いた「外国産動物絵巻」が桂川家に伝わっており、そのなかに犀蹄や犀尾もあった³⁾。

山本読書室資料のひとつ「識名園六珍詩画帖」（寛政十年四月、町口海嶠序）にも犀尾が2図描かれている（写真5、写真6）。小野蘭山の門人で、山本亡羊の本草研究仲間だった百々俊道（号識名園）が所蔵していた禿鶯頭（東東洋）、銀蛇（岡本豊彦か）、燈絲扨子（喜多武清）、石燕（原在明）、犀尾（円山応瑞、原在正）、含生草（田中訥言）の六珍をそれぞれ画家に描かせ（括弧内に画家名）、仲間に賛を書かせたものである。犀尾は松本愚山が賛、禿鶯頭は皆川淇園が序、富士谷成章、柚木太淳、畑橋州が賛を寄せている。読書室には六珍のうち、石燕を除く禿鶯頭、銀蛇、燈絲（唐糸竹）扨子、犀尾（写真7）、含生草（写真8）の5品が今も伝わっている。

山本読書室の甫周訳并模犀図は蘭学勃興以来東西で別々に起こった博物収集の流れの交流を示す興味深い資料と言えよう。

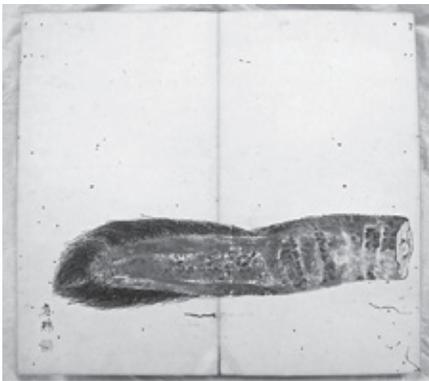


写真5 「識名園六珍詩画帖」犀尾

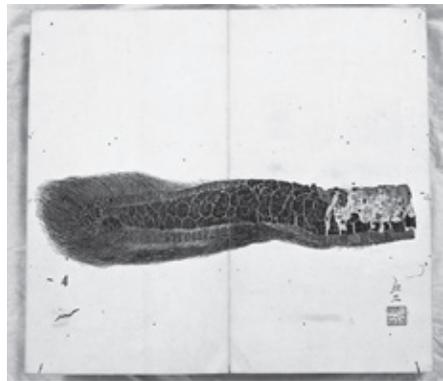


写真6 「識名園六珍詩画帖」犀尾



写真7 犀尾 標本



写真8 含生草

2. 犀図の典拠

ヨンストンスとは

甫周犀図の上部には甫周の翻訳による漢文の犀説が自筆で書き込まれている(写真9)。その末尾に「右は和蘭^{おらん}伍乙志^{ウオイツ}著す所^{シカトカメル}の止訝^{ヨンストンス}薦葛墨兎^{ヨンストンス}の説なり、全図は勇思東私の禽獸譜に出ず」(右和蘭伍乙志所著止訝薦葛墨兎之説、全図出勇思東私禽獸譜)と典拠を示している(写真10)。犀説の典拠については次章で検討することにして、ここでは犀の「全図」を載せている「勇思東私禽獸譜」について書誌的な考察を加える。

桂川家家蔵の蛮書に「ヨンストンスといふ生類図説」があったことは甫周の弟森島中良が『紅毛雑話』(天明7年9月13日、甫周序)で伝えている。「ヨンストンス」はポーランド人医師・博物学者ヤン・ヨンストン(1603-1675)の『動物図譜』蘭訳(アムステルダム、1660)第1部の刻版標題紙に、D.^R I. Ionstons Beschrijving vande Natuur Der Viervoetige Dieren (I. ヨンストン博士の四足動物博物誌、の意)とあるのを、属格の知識がないために、著者名を「ヨンストンス」と誤ったことによる。

甫周が犀図を完成させたのは、犀説の末尾に「大日本天明二年歳次 壬寅夏五月乙巳 侍御^い医桂川^{せいみん}甫周世民訳并摸」(写真11)とあるところから、天明2年5月9日と分かる。この年、甫周は29歳。3月1日には阿蘭陀商館長ティチングが將軍拝礼を行っている。前年の閏5月18日に將軍の世子となった一橋家の長千代(のち將軍家斉)はこの3月加冠して従三位権大納言の叙任を受けた。甫周は前年以來、父親とともに世子の診療掛に任ぜられていた⁴⁾。

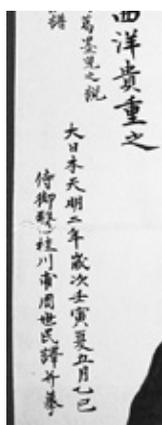


写真11

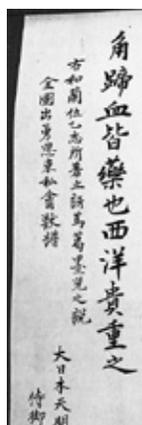


写真10



写真9 甫周訳 犀説

天明初年に舶載された「ヨンストンス」としては、平戸の松浦史料博物館に松浦静山旧蔵本が伝わっている。この松浦本は阿蘭陀通詞吉雄幸左衛門(耕牛、1724-1800)の旧蔵本である。蘭書の蔵書家でもあった吉雄幸左衛門が江戸の長崎屋で、「アンドルアルツウエーレルド」すなわち、アタナシウス・キルヒャー『地下世界』蘭語版 A. Kircher, *d'Onder-aardse weereld*. Amsterdam,

1682 を披露し、蘭学仲間を驚かせたことも『紅毛雑話』が報じている。

江戸では、平賀源内が甫周よりも早く明和5年春3月にヨNSTON『動物図譜』（1660）を入手していた。源内は「物産書目」で、これを「紅毛禽獸魚介蟲譜 壹帖」と名付け、紙員を記載している。それによれば、本文357枚、「獸画」79枚、「魚画」47枚、「介画」20枚、「禽画」61枚、「蟲画」40枚、白紙3枚、「凡六百七紙」とある。源内旧蔵本は伝わらないようだ。

甫周旧蔵ヨNSTON

さて、桂川甫周旧蔵のオランダ語原書「勇思東私禽獸譜」が幸いなことに、大阪市開平小学校に伝わる愛日文庫の一冊として、現存する⁵⁾。大坂の豪商で蘭癖収集家の山片重芳（1764-1836）が仙台藩医大槻玄沢から入手したものである。かつては松浦本と比べると傷みが激しかったが、現在では関係者の努力によって修復されている。

愛日文庫本の寸法は縦38cm、横24cm、厚さ9.2cmの重厚なフォリオ版である。赤みを帯びた総皮の豪華装丁が施され、背タイトルは「IONSTON / VAN / DE DIEREN」（ヨNSTON動物誌、の意）の金文字が刻されている（写真12、写真13）。修復以前は更紗を模して印刷した紙表紙に包まれており、その中央に「勇思東私 完」との書き題簽が貼られていたが、現在では紙表紙は別置されている（写真14）。

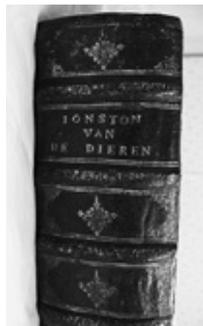
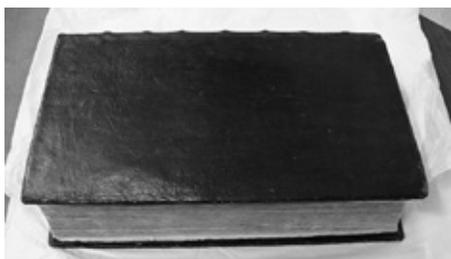


写真12 甫周旧蔵ヨNSTON 愛日文庫蔵

写真13 同書背表紙

写真14 甫周旧蔵ヨNSTON 紙表紙

巻頭の総合ーフタイトルは次のように破損が激しい。

(...) *Naeukeurige* / BESCHRYVING / Van de Natuur der / VIER-VOETIGE DIEREN, / VISSSEN
/ En / Bloedlooze WATER-DIEREN, / VOGELLEN, / (...) KEL-DIEREN, / (...) DRAKEN.

これを松浦本によって復元し、試訳を付けよう。

I. JONSTONS / *Naeukeurige* / BESCHRYVING / Van de Natuur der / VIER-VOETIGE
DIEREN, / VISSSEN / En / Bloedlooze WATER-DIEREN, / VOGELN, / KRONKEL-DIEREN,
/ SLAGEN en DRAGEN.

(I. ヨンストン著『四足動物, 魚類, 無血水棲動物, 鳥類, 環節動物, 蛇竜類の精説博物誌』)

修復以前に撮影されたマイクロフィルムによれば, 全体の構成は以下の通りである。

6 parts in 1 vol. Folio.

Part 1 (四足動物) : pp. (10), 1-89, 86 (=90)-136, 139-168, 170-176, 165 (=177)-194; 79 (of 80) leaves of plates (Tab. XXXVII lacking)

Part 2 (魚類) : pp. (8), 1-35, 35 (=36)-89, 84 (=90)-92, 95-102, 203 (=103)-175, 172 (=176)-179 (=183); 48 leaves of plates

Part 3 (無血水棲動物) : pp. (1), 1-24, 27-56; 20 leaves of plates

Part 4 (鳥類) : pp. 1-52, 55-98, 100-181; 62 leaves of plates

Part 5 (環節動物) : pp. (8), 1-60, 63-94, 97 (=95)-144, 146-152; 28 leaves of plates (Tab. VII doubled, Tab. VIII lacking)

Part 6 (蛇竜類) : pp. 38, (1); 12 leaves of plates

刻版標題紙は Part 1, Part 2, Part 4, Part 5 の 4 部に置かれ, Part 3 と Part 6 の 2 部は刻版標題紙のかわりにハーフタイトルを持つ。刻版標題紙を除く銅版図版は部分的に欠損しているものも含めて, 総計 249 枚となる。総合ハーフタイトルの次に位置する Part 1 の刻版標題紙 (写真 15) を翻刻し試訳をつけよう。

D.^R I. IONSTONS / Beschrijving vande Natuur / DER / VIERVOETIGE DIEREN / neffens haer Beeldenissen / in koper gesneden. / *Uyt 'et Latyn Vertaelt / door M. GRAUSIUS / Dokter in de Medesynen / tot Amsterdam.*

T 'AMSTERDAM, / Bij I.I. SCHIPPER, op de Keyzers gracht. 1660. / *Met Privilege voor 15 Iaren.*

(I. ヨンストン博士著『四足動物博物誌 銅版図添 アムステルダムの医師フラシウス氏によるラテン語からの翻訳』アムステルダム, ケイゼルス・フラハト沿い I.I. スヒッブル書店 1660 年刊 15 年間の允許付)

銅版のプレス跡を避けるように右下の余白に, 桂川甫周の蔵書印「HOZUW.」(朱印) とオランダ人旧蔵者「Corn: Chastelein」のペン書き署名が認められる (写真 16)。

甫周の蔵書印「HOZUW.」は石川県立図書館の加賀藩旧蔵本メイエル『語彙宝函』第 8 版 L.

Meijer, *Woordenschat*. 8ste druk, Amsterdam, 1720. にも見られる。「Corn: Chastelein」の署名を遺したコルネリス・カストレイン (1657-1714) は 1708 年にオランダ東インド会社の在バタヴィア常任理事となった開明的な植民地官僚で、博物学にも造詣が深くルンフィウス『アンボイナ植物誌』G. Rumphius, *Herbarium amboinense*. 1741. の遺稿を編集したことで知られている。

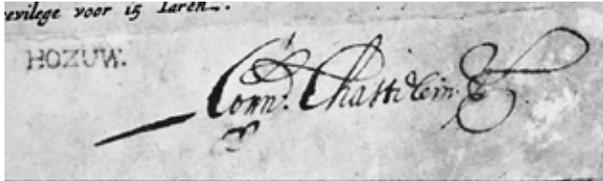


写真 16 標題紙 洋印と署名

写真 15 同書 刻版標題紙 愛日文庫蔵



甫周が「全図」と呼んだ問題の犀図は Part 1 の本文 p. 78 の次に位置する第 38 図 (Tab. XXXVIII) である (写真 17)。綴じ目と小口を天地とし、銅版のプレス跡の寸法は縦 17.5cm, 横 29.3cm。図の上部に犀のラテン語名「RHINOCEROS」を掲げ、ドイツ語名「Hornnase」と「Rhinocer」を添える。図はいわゆる「デューラーの犀」⁶⁾ 図 (1515, 木版) をもとにしており、頭部が右向きである。甫周がこの銅版図を拡大模写したとすれば、模写にあたって原図の陰影と背景を捨て去り、左右逆にして約 5 倍拡大したことになる。原図よりも頭を地面から高くし、角をより大きく書き、目を大きく鋭くして、全体として精悍な姿に作り変えている。原図の細やかな線刻は生かされていない。拡大模写にしても原図からの距離感は否めない。左右逆転となった事情も不明である。

疑問は残るが、現時点では、「全図は^{ヨンストンス}勇思東私の禽獸譜に出ず」「侍御医桂川^{じざよい}甫周^{せいみん}世民訳并模」の自書に基づき、甫周が所蔵の「^{ヨンストンス}勇思東私」の犀図を拡大模写したものと考えたい。寛政年間に同じヨンストン犀図を模写した谷文晁、石川大浪、石川孟高ら洋風画家の犀図⁷⁾ は原図により忠実な模写であり、すべて頭部は原図と同じく右向きである。時代は下るが、桂川甫賢が「皮休封獸譜」すなわちビュフォン『博物誌』蘭訳から麝香猫図を拡大模写した「麝」図 (杏雨書屋所蔵)⁸⁾ が残っている。甫賢は祖父の甫周よりも画才に恵まれたようである。

もう一つの甫周犀図

甫周犀図の出現により、これまで筆者不明であった犀図を甫周筆と見なすことができるようになった。問題の犀図 (写真 18) は神戸市立博物館所蔵池長孟コレクションに属し (雑系-特軸 8)、池長孟が「芝蘭堂旧蔵 大槻磐水家伝来」品として、北山寒巖筆ヘイステル像 (江戸系-軸 8)、鳥類図 (雑系-軸 16, 立双幅：右幅駝鳥図, 左幅火食鳥図, 大槻玄沢賛) とともに大槻茂雄から

譲り受けたものである。紙本の寸法は縦 113.2cm, 横 109.8cm あり, 岩倉家伝来の甫周犀図(縦 80cm, 横 117.5cm)と比べると, 上部の余白が目立つ。ここに甫周訳の犀説が書き込まれる予定であったかもしれない。

大槻家伝来の犀図は, 岩倉家伝来の甫周犀図の角が原図よりも長く力強く画かれ, 尾が勢いよくはねているのに対し, ややおとなしい印象を与える。改装されているが, 保存されている元装の外題には「筆者不詳 犀 文化六年巳十月十日□□□」とある。甫周はこの年 6 月 21 日に没している。当時から筆者不詳となっていた事情は不明である⁹⁾。



写真 17 甫周旧蔵ヨンストン 犀図 愛日文庫蔵



写真 18 大槻家旧蔵 犀図 神戸市立博物館蔵

長崎におけるプリニウス

江戸におけるデューラー犀図の流布は、今回出現したヨNSTONによる天明2年の甫周犀図が最初であろうか。この問いに答えるために、ひとまず海外情報の先着地である長崎に目を転じてみよう。

長崎ではヨNSTONと同様のデューラー犀図を載せたプリニウス『五卷本博物誌』オランダ語版 C. Plini Secundi, *Des wijdt-vermaerden Natuurkondigers vijf Boecken*. Amsterdam, Dirck Dircksz., 1662. (松浦史料博物館所蔵本による) が安永年間から阿蘭陀通詞の間で知られていた。阿蘭陀通詞松村元綱(翠崖, 生没年不詳)は安永7年長崎を訪れた三浦梅園(1723-1789)に「今南懷伯仁の渾輿外紀は西洋のプリニウスと云ふ人の造れる書の抜き書の様なるものなり。本書事甚だ広し。直に其の書をプリニウスと云ふ」(帰山録)と解説している。在華宣教師南懷仁(フェルビースト F. Verbiest, 1623-88)の『坤輿外紀』は海外の珍奇な動物を紹介した短い博物誌であり¹⁰⁾、漢籍にも通じていた松村元綱は、プリニウスとの類似を指摘したわけである。

三浦梅園よりも早く安永3年から翌年にかけて長崎に滞在し、松村元綱や本木良永と交わった平沢元愷(旭山, 1733-1791)は両者から得た海外の地理や異獣の知識をその長崎見聞録「瓊浦偶筆」に盛り込んでいるが、主に『坤輿外紀』と『職方外紀』が典拠となっており、プリニウスの影響は認められない。犀についての記述も『坤輿外紀』と『職方外紀』の記事をそのまま利用している。長崎歴史文化博物館の本木家文書に伝わる「万国図説」(題簽による。内題は万国地理図説, 4巻1冊)は序跋、編者名を欠いており、成立時期も不明であるが、内容は『職方外紀』の「五大州総図界度解」および巻1~巻4の翻訳であり、当時、松村元綱と本木良永が協力して翻訳した可能性が高い。紙数の多い方の手は良永の自筆と認められる。

安永6~7年頃、長崎の阿蘭陀通詞の間でヨNSTONとプリニウスが流行したことを示唆する貴重な史料が仙台市博物館にある。同館の藤塚家文書に含まれる名山蔵旧蔵「和蘭本草拔翠」と「紅毛禽獸図畧」(写真19)である。名山蔵は林子平の支援者であった塩釜神社祠官藤塚知明の文庫名である。

「和蘭本草拔翠」はヨNSTONの銅版図から計129図を縮写したもので、犀図は含まれていない。末尾に「安永己亥秋八月廿日源知写之」と墨書され、安永8年8月20日に藤塚知明が作成したことが分かる。「紅毛禽獸図畧」は犀図も含めて、プリニウス『五卷本博物誌』の銅版挿絵全53図をすべて写し取っている。両冊と模写は稚拙で絵心を感じさせない。動物名はオランダ語名がカタカナで書き入れられているが、添えられたオランダ語名はアルファベットの体をなしていない。両冊は安永6~7年に林子平が二度目の長崎行きで入手してきた写本を知明が複写したものと推定される¹¹⁾。

長崎の阿蘭陀通詞仲間におけるプリニウスの流行を裏付ける重要な事例として、天明2年仲秋の自序をもつ志筑忠雄『万国管闕』(長崎文化博物館所蔵)を挙げなければならない。この読書ノートのなかで志筑は、「フリニウス」の書によって、人魚(原書 p. 518)、ライオンや象を倒した獵犬(原書 pp. 249-250)、ライオンの怒りの原因が尾の針にある話(原書 p. 140)、雌ライオ

ンは淫乱であること (pp. 136-137), グリフィン (「キリフーン」, 原書 p. 459), オランウータン (「半人獣」, 原書 p. 29) などを紹介している。さらに志筑忠次郎 (忠雄) 『海上薬品記』 (天明3年2月成, 津市図書館稲垣文庫所蔵) では羊 (原書 pp. 285-295) が訳出されている。

プリニウス『五卷本博物誌』 (松浦本) は小オクターヴォ版1冊であり, 銅版挿絵は全53図に及ぶ。犀図は同書の第2巻「四足動物篇」第20章 Van de Rhinoceros. Neushoorn. (p. 161) に掲載されている (写真20)。図の動物名は Rhinoceros と綴られている。ヨンストンの犀図と同様, 銅版図であるが, 頭部は左向きである。



(左) 写真19 「紅毛禽獣図畧」仙台市博物館蔵

(右) 写真20 プリニウス「五卷本博物誌」犀図 松浦史料博物館蔵

本文の蘭文解説は古代のストラボン『地理書』やクラウディウス・アエリヤヌス『動物誌』によって犀と象の戦いを紹介しているが, リンスホーテン Jan Hugo van Linschoten (1563-1633) やラウレンティウス・スリウス Laurentius Surius (1522-1578) の近代文献も引用している。

プリニウス『五卷本博物誌』は古代博物学者の名前を著者に掲げながら, キリスト教的自然観に立って大航海時代以来の近代の博物情報を盛り込んでいる所に特徴がある。小本ではありながら, この点はほとんど古代文献に依拠したヨンストンと対照的である。

不利爾宇須略解

さて, 松浦静山は所蔵本を底本として「フリニウス畧解 壺巻」を長崎の「訳人」に作らせた。同書を記載した「平戸藩楽蔵堂蔵書目録」巻十四の注に, 静山は「フリニウスハ阿蘭陀ノ書名, 略解は長崎ノ訳人作レリ, 則所言ノ禽獣虫ノ図モ依本書謄写載此」と書き入れている。この「フリニウス畧解」とは題簽に「不利爾宇須略解」とある12丁の写本 (国立科学博物館所蔵) のことである。原書の刻版標題紙と銅版挿絵全53図から選んだ22図を原寸大で薄葉紙に模写して張り付け, 22図各図の下に, 対応する原書の解説文を抄訳している。原書各図の繊細な刻線を一線ごと毛筆で精密に再現し, 背景も陰影も省略していない。

「不利爾宇須略解」の犀図 (写真21, 写真22) の解説を以下に翻刻する。読点は私に付した。

リノセーリユス 犀

犀ハインデヤの地にあり。形象に似て長けひきく、口鼻ハ家猪ニ似、鼻の上に一角有り。至て堅きもの也。又前足の通り背の上ニツの小角あり。惣身黄色又は白黒の斑あるも有り。背より四足まで貝のからの如き鱗あり。天性象に敵対する獸にて、象を身掛くれハ角を岩にて研り象の後を突と云ふ。犀角の毒を解する事、ウニカウルニ齊しと云。毎朝谷へ下り角にて水を攪飲む。夫故諸獸集り待うけて犀の飲し後をのむと云ふ。



写真 21 松浦静山旧蔵
「不利爾宇須略解」
犀図
国立科学博物館蔵

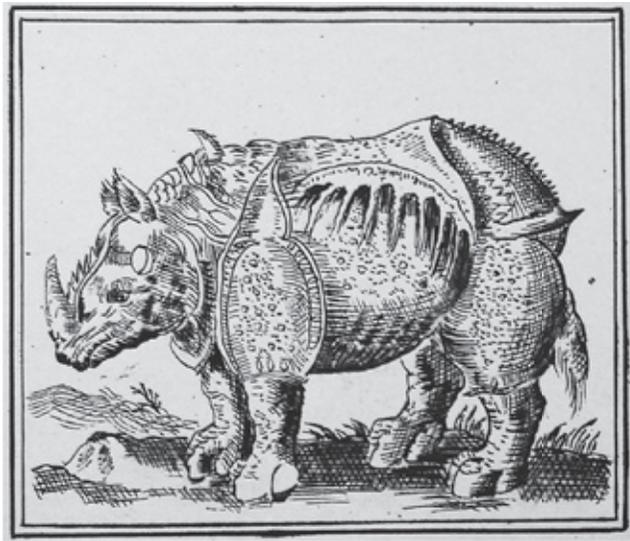


写真 22 同書 犀図 拡大図

この抄訳は原文のストラボンとリンスホーテンからの引用によっており、1515年にポルトガル国王（ドン・マヌエル一世）がリスボンでインド犀と象を闘わせ象が負けたことを報ずるラウレンティウス・スリウスの記事は訳出されていない。1515年5月20日に行われたこの戦いのニュースがニュルンベルクのデューラーの元にとどき、デューラーが想像で犀を画き、木版にしたことはよく知られている。

「不利爾宇須略解」の訳者は松村元綱と推定される。その根拠としては、上述したように元綱が安永7年からプリニウスを重んじていること、原書の「ウニカウル」（一角）項目を松浦本から抄訳した元綱の訳稿「和蘭本草摘要解」（京都府立植物園大森記念文庫所蔵）があること、元綱は静山が庇護した阿蘭陀通詞本木良永の親友であることなどあげられる。

安永天明期の長崎でこのように注目されたプリニウス『五卷本博物誌』が同時代に江戸で知られた確たる形跡は、これまで確認できていない。林子平がもたらしたと思われる「紅毛禽獸図畧」は江戸を通り抜けて塩釜の名山蔵に収まったようである。江戸では桂川家のヨンスターがデューラー犀図の最初の受容例とってよいであろう。

3. 甫周訳犀説の典拠

全文翻刻

つぎに、山本読書室資料の犀図の上部に書き込まれた漢訳犀説の典拠を確定しよう。そのため
にまず、犀説全文を翻刻し、読み下しを試みる。翻刻には読点を、読み下しには句読点を私に加
えた。

犀 利訥説魯私羅甸 二語翻鼻角
涅烏思荷倫和蘭

此物産亜弗利加州喜望峯地方及支那暹羅諸処山中、又能居水中、其形大垂象、褐色带黒、全
身無毛、皮甲甚堅、刀箭不能入、遠望之攢甲甚、脚甚大如着鱗甲韞、其嘴似野猪而尖、其食
物也齧声類野猪、故不遠聞、舌上有刺如鑪状、每食棘刺、鼻上有一角甚堅确、形如半月、長
二尺許、或三四尺、怒則直衝、穿燥地飛砂石於身後、百獸俱慴伏、尤憎象、偶值必逐与之鬪
以角、触其腹而斃、故名象吏、言其制象猶吏之制罪人也、或云其將鬪也必加其角於石上而磨
之、又項上有一角長六七寸、耳目俱小且常瞪視、頸不能回、如人偶之就其左右、却行則遂不
見、性不害人類、但憎赤色、如值服赤衣者必怒殺之、以刺舌舐其肉、盡之及骨、其暴惡如此、
体有異香甚烈、認其香而求之必得其所居也、角蹄血皆藥也、西洋貴重之
右和蘭伍乙志所著止訝葛墨兒之説、全図出勇思東私禽獸譜
大日本天明二年歲次壬寅夏五月乙巳 侍御医桂川甫周世民訳并摸

読み下しは次の通り。句読点と振り仮名を私に付けた。

犀 リノセロスラテン 利訥説魯私羅甸 二語鼻角に翻ず
ネウスホルンオランダ 涅烏思荷倫和蘭

此物は亜弗利加州喜望峯地方及び支那暹羅の諸処山中に産す。また能く水中に居す。其形大
なること象に垂ぐ。褐色にして黒を帯び全身毛無し。皮甲は甚だ堅く刀箭入る能わず。之を
遠望すれば甲を攢うこと甚だし。脚は甚だ大にして鱗甲の韞を着するが如し。其の嘴は野猪
に似て尖り、其の物を食らうや齧声は野猪に類す。故に遠くには聞こえず。舌上に刺あり
鑪の如き状なり。毎に棘刺を食らう。鼻上に一角有り甚だ堅确なり。形は半月の如く、長
さ二尺許り或いは三四尺。怒れば則ち直衝して燥地を穿ち、砂石を身の後ろに飛ばす。百獸
俱に慴れ伏す。尤も象を憎む。偶値えば必ず逐い、之と鬪うに角を以てす。其の腹を触し
て斃す。故に象吏と名づく。其の象を制すること猶お吏の罪人を制するがごときを言うなり。
或は云う、其の將に鬪わんとするや必ず其の角を石上に加きて之を磨くと。又項上に一角有
り、長さ六七寸。耳目俱に小さく且つ常に瞪視す。頸は能く回らず。如し人之に偶い其の左
右に就くも、却行すれば則ち遂に見えず。性、人類を害せず。但し、赤色を憎む。如し赤衣

を服する者に値^あえば、必ず怒りて之を殺す。刺舌を以て其の肉を舐め、之を盡すこと骨に及ぶ。其の暴悪なること此の如し。体に異香有り、甚だ烈し。其の香を認めて之を求めれば必ず其の居所を得るなり。角、蹄、血、皆薬也。西洋之を貴重す。

右は和蘭^{おらんだウオイッ}伍乙志^ツ著す所^シの止訝^カ薦^ト葛^カ墨^{メル}兎^ルの説なり、全図は勇思^{ヨンス}東^{トンス}私の禽獸譜に出ず。

大日本天明二年歳次 壬寅^{みづのえとら}夏五月乙巳^{きのとみ} 侍御医桂川甫周世民訳并模

この犀説の本文はのち、大槻玄沢編訳「蘭畹摘芳」筆録本¹²⁾ 卷一の「犀」に、ほぼそのまま白文で収録されている。訳者甫周の名は伏せられ、冒頭は「犀 西書曰亜弗利加州加歩之喜望峰地方及支那暹羅諸処山中」となっている。「加歩」はオランダ語 Caap (喜望峰) の音訳である。末尾は「西洋貴重之」の代わりに、「角功用類一角、代用之可也、主治消毒発汗止下利或攻為器皿無中毒之患云」(角の功用は一角に類す、之を代用して可なり、主治、消毒発汗、下利を止む、或は攻して器皿と為さば中毒の患無しと云う)と効能を記している。

続く「犀牙」項目(天明8年、大槻玄沢筆)では、この年3月に参府したオランダ商館医師「与般亜爾諾兎篤斯突都兎」(ヨハン・アルノルト・ストツツル)から「利諾泄魯斯丹多」(リノセロスタント、rhinoceros tand)すなわち「犀齒」を「兩枚」贈られ、そのうち「単牙」の方は自分が、「兩牙」の方は「医官桂川君」すなわち桂川甫周が「懇ろに之を求め」たという¹³⁾。また、玄沢は「訳官某」から「斯突都兎」が「近来入貢中最も達士為り、天資英邁敏捷、術業に精しく且つ楮鞭の技に篤志あり」と聞かされ、博物標本の交換を約束することになったという。

この玄沢の証言からステュツェル(Johan Arnoldt Stützer)に対するそうした評価が阿蘭陀通詞仲間¹⁴⁾で定着していたことが推測される。実際、ステュツェルはツェンベリーの門人であり、ウブサラ大学図書館所蔵のツェンベリー来簡集に伝わるステュツェル書簡¹⁴⁾によれば、阿蘭陀通詞茂節右衛門はツェンベリーから直接博物学を教授されたことを誇りにしており、ツェンベリーを懐かしみ、その安否をステュツェルに尋ねている。ステュツェルがツェンベリーの門人であることを玄沢や甫周が認識していたかどうか、不明である。日欧博物交流史のなかで阿蘭陀通詞の果たした役割をさらに解明する必要がある。

甫周の漢訳犀説は、さらに後年、天保年間に京都で出版された内藤尚賢『古方薬品考』(天保12)の巻5にそのまま訓点を施して再録されている。その冒頭は「伍乙志」を「ドイツ」と誤って、「桂川甫周 和蘭^{ドイッ}伍乙志^ツ著す所^シの止訝^カ薦^ツ葛^カ墨^{ムル}兎^ルの説ヲ訳ス 犀^アハ^{フリ}カ^カ喜望峯地方及ヒ支那^{シヤムロ}暹羅ノ諸処山中ニ産ス」(原漢文)云々で始まり、末尾は「西洋之ヲ貴重ス 全図ハ勇思東^{ヨンス}私カ禽獸譜ヲ模ス」となっている。しかし、木版で掲げられた犀図(内匠大允在明写)はヨンストンではなく、ボイス『新修学芸百科辞典』所収図(後述)を画家原在明が模写したものである。原在明は先に見たように「識名園六珍詩画帖」の「石燕」を描いていた¹⁵⁾。

ウォイト『医薬宝函』

甫周が犀説の典拠として挙げている「伍乙志所著止訝薦葛墨兎」は「ウォイツ」(Woyt)所著

「シカトカメル」(*Schatkamer*)、すなわちウォイト『医薬宝函』蘭訳 Johannes Jacob Woyt, *Gazopylacium medico-physicum, of Schatkamer der genees-en natuur-kundige zaaken*. Amsterdam, 1st ed. 1741, 2nd ed. 1766. にあたる。原書名は字義的には「医・理学宝庫または医・理学諸事宝庫」の意味である。大槻玄沢編訳・山村才助考訂「蘭畹摘芳」筆録本に、「伍乙志」の振り仮名が見られるところから、甫周も著者名の音訳「伍乙志」を「ウォイツ」と発音していたらしい。なお、宇田川玄真・榕菴『遠西医方名物考』(文政5~8年刊)は、この原書の「増補書」(1766年版)を「伍乙都医事纂要書」として引用している。

このオランダ語原書は杉田玄白が安永2年正月の建部清庵あて答書で、「ウヲキトシカトカームル 内外医方集成ノ書」として紹介した薬物辞典である。早くは京都の典医荻野元凱が『刺絡編』(宝暦13年, 1763刊)で「西書」「失曷贅的^{シカーツテカンムルブツク}。干姥児蒲贅孤」として Vena (血管) 項目を利用している。長崎の阿蘭陀通詞のあいだでは1760年代から *Lexicon* または *レキシコン* と呼ばれて輸入薬品の調査に使用されていた¹⁶⁾。志筑忠雄『万国管闕』(序, 天明二年壬寅之仲秋)では「シカトカームル」の書名で引用されている。志筑忠雄『海上薬品記』(前掲書)では、「ウヲイツ所著シカトカアムル之書」として、「鮭答 俗所謂ヘイサラバサラ」「蝦眼 ヲクリカンキリ」「龍涎」「木乃伊」「ウウィンロラド 即ヘンルウタ」「サルヒヤ」「蕃紅花^{サフラン} 泊夫藍」「的里亜加」「一角」「地生羊」の10薬品が訳出されている。松浦史料博物館所蔵のウォイト蘭訳初版は吉雄幸左衛門旧蔵本である。

ウォイト『医薬宝函』蘭訳初版¹⁷⁾ (Amsterdam, De Janssoons van Waesberge, Hendrik Viergot, Abraham en Isaak Graal, 1741) でサイ項目を検索すると、p. 462 に RHINOCEROS, Zie *Cornu Rhinocerotis*. とあるように、CORNU RHINOCEROTIS (犀角) 項目 (pp. 133-134) を参照させるのみで、独立したサイ項目はない。これに対し、同書蘭訳第2版 (Amsterdam, Abraham Graal, Gerrit de Groot en Zoon, 1766) では、CORNU RHINOCEROTIS (犀角) 項目 (pp. 201-202) の末尾に、Zie voort op *Rhinoceros* との表記でリノセロス項目 RHINOCEROS (pp. 685-686) を参照させている。

蘭訳初版はその標題紙によればドイツ語原書第10版を底本とし、訳者はアムステルダム医師スメレンティン Joann: Chirsti: Schmellentin である。第2版はその標題紙によればドイツ語原書の第14版を底本としているが、訳者の名前は消えている。初版本文第1ページの巻頭題が *Schat-kaamer der Genees- en Heel-middelen*. (医薬宝函) であるのに対し、第2版のそれは *Schatkamer der Natuur- en Genees-kunde, en van alles, wat in de Heel-Schei- en Artzeny-kunst, en in de Natuurlyke Historie noodigst en weetenswaardigst is*. (理学・医学宝函, また外科学・化学・薬学・博物誌において必要かつ知るに値する全ての事柄の宝函) となっており増補内容を示している。初版にはない犀の博物誌が増補されているのもうなずける。

犀説のオランダ語原文

比較検討の結果、甫周は「犀」説の翻訳に当たって、蘭訳第2版(1766)の RHINOCEROS 項目を主としながらも、初版の CORNU RHINOCEROTIS (犀角) をも合わせて使用したことが判明した。

以下に、両者を翻刻し、試訳を付す。ただし、原文のラテン語の見出しの後に添えられたゴシック体 (Gothic script) のオランダ語名とカンマ (/) はローマン体に直した。また、試訳は段落に分けた。

蘭訳第2版 (1766) の犀 RHINOCEROS 項目

RHINOCEROS, Neushoorn, Rhinoster, is, naast den Oliphant, het grootste viervoetige Dier van de bekende Waereld, welk onder de *Amphibia*, en herkaauwende Dieren gerekend wordt. Zyn huid is zonder haar, en ziet 'er van verre uit, als of 't enkel Schilden waren, schoon 't maar ruwheden van de borstels zyn; zy is donker, aschverwig van kleur, naar 't zwart trekkende, en even hard, als die van een Oliphant, zoo dat 'er de pylen op afstuiten. Zyn muil is als die der Zwynen, maar veel spits; en 't gnort ook als een Verken, doch laat zich op geen verren afstand hooren. Dezelve is gewapend met een harden, sterken hoorn, van onderscheiden grootte, donker-groen van verwe, en als eene ploegschaar gebogen. Somtyds is 't wel 2 voeten lang. Als het dier vergramd is, graaft het daar mede steenen uit den grond, die het verre over zynen rug heen weet te slingeren. Ook tast het, zoo het zyn doodlyken Vyand, den *Oliphant* niet kan te ontloopen, denzelven daarmede aan, en ryt hem somwylen 'er den buik mede op. Aan deszelfs voorhoofd groeit nog een andere hoorn, die meer dan zes duimen uitsteekt; en de gedaante heeft van een halven omgekeerden kogel. De Ooren en Oogen zyn klein, en met de laatste ziet hy enkel regt uit, zoo dat men door zydelings af te gaan, zyne nadering ontwyken kan; dewyl het zich zeer bezwaarlyk kan omdraaijen. Ongemeen scherp is de reuk van dit Dier; en 't weet daar door zynen roof gereedlyk te vinden. De beenen zyn zeer dik, en schynen als in geschubde laarsen te hangen. De pooten zyn kloek. Men vindt het veel om en by de Kaap der goede Hoop; doch 't zal geen Mensch, ten zy getergd, eenig leed doen. De roode kleur zou, volgens sommigen, zeer by 't zelve gezocht zyn; waarom het de gene, die dus gekleed zyn, ongenadig aantasten zou en vernielen, lekkende door zyn scherpe en als met vylen voorziene tong, het vleesch wel haast geheel van de beenen af. In de Geneeskunde gebruikt men zyne hoorns, nagels en bloed, als vergift weërstaande, zweetverwekkende, en in buikloopen. Doch wy kunnen deese middelen zeer wel missen: en in *Asia* en *Africa* zyn ook andere Medicynen genoeg om aan die oogmerken van geneezing te beantwoorden.

(試訳)

犀 (リノセロス, ヌースホールン, リノステル) は既知の世界では象に次いで最大の四足獣であり, 両生類と反芻動物に数えられている。皮膚は無毛で刷毛のように粗剛であるけれども遠方からはまるで盾のように見える。皮膚はくすみ, 灰色で黒みを帯びており, 象の膚とおなじぐらい堅く, 矢もはね返るほどである。口は猪の口に似ているが, より尖っている。

豚のように鼻を鳴らすが離れたところからは聞こえない。

武器として堅く強固な角を持っており、大きさは様々。暗緑色で鋤の刃のように曲がっている。長さ2フィートになることもある。この獣は怒ると角で地面から石を掘り出し、背後に放り投げる才がある。また不倶戴天の敵である象との出遭いが避けられないとなると、角を立てて象に襲いかかり、時に角でその腹を切り裂くことがある。

額にはもうひとつ角が生えている。それは6インチ以上突き出ており、弾丸の半分を逆さにした形をしている。耳と目は小さく、目で前ばかり見ている。そのため人は脇に反れることでその接近を避けることができる。相手は体を回すことが大変難しいからである。

この獣の嗅覚は非常に鋭い。それによって獲物をすぐさま見つけることができる。脚は大変太く、鱗で覆われた長靴を履いたように垂れ下がってみえる。足は頑強である。犀は喜望峰周辺に多く見られる。しかし、苛立たせないかぎり人に危害は加えない。一説によればこれ自身赤色を大変好む。そのため赤い服をきた人を容赦なく襲い殺し、鋭く鑢のような舌を用いて肉を骨から、たちまちのうちに、すっかり舐め取ってしまうという。

医術では角と爪と血が解毒剤、発汗剤、下痢止めとして用いられている。しかし、我々がこれらの薬剤を手に入れるのは大変難しい。アジアやアフリカでも、そうした医療目的にかなう他の薬剤がある。

蘭訳初版（1741）の犀角 CORNU RHINOCEROTIS 項目

CORNU RHINOCEROTIS, Neushoorn, is een dik, vast, en hardhoorn, omtrent een el lang, het is van buiten zwart of grauw, van binnen wit-achtig, heel zwaar en sterk, het is gekromt als een halve maan, beneden dik, en boven punt-achtig; dit [sic] hoorn groeit op de neus van een dier dat *Rhinoceros* genoemd word in West-Indien, dit dier is by na zo groot als een Oliphant, het word ook genoemd Oliphant-meester, om dat het met zyn hoorn den buik van den Oliphant open scheurt, en op deze wyze meester van den zelven is, deze hoorn komt in krachten met den Eenhoorn by na overeen, het word ook zomtyds in deszelfs plaats gebruikt. Men maakt daaruit ook beekers en kommetjes, en men zegt dat zommige zig voor 't vergif als ze hier uit drinken zoeken te bevryden, edoch zodanige moeten al een zeer sterk geloof hebben.

（試訳）

犀角（コルヌ・リノセロティス、ヌースホールン）は分厚く堅固で長さは約1エル、外側は黒色または灰色で、内側は白みを帯びている。大変重く強固で半月のように曲がっており、下部は分厚く上部は尖っている。この角は西インドでリノセロスと呼ばれる獣の鼻に生えている。この獣はほぼ象を同じほどの大きさがあり、象の支配者と呼ばれている。その角で象の腹を突き破り、そうやって象を制するからである。

この角は効能の点で一角とほぼ一致しており、ときどきその代わりに用いられる。またこ

れから椀や小皿が作られる。それらで飲んで毒から身を守ろうとするものがあるというが、そうした人は頑固な迷信家にちがいない。

なお、ウォイト蘭訳第2版(1766)のRHINOCEROS項目はほぼ同文が、ボイス編訳『新修学芸百科辞典』Egbert Buys (transl.by), *Nieuw en volkomen woordenboek van konsten en wetenschappen*. 9de deel. Amsterdam, 1777. pp. 163-164のRHYNOCEROS項目に再録されている。ボイスは原書W. Owen, *A new and complete dictionary of arts and sciences*. 2nd ed. Vol. IV. London, 1763. pp. 2782-2783の



写真23 ボイス「新修学芸百科辞典」犀図
個人蔵

RHINOCEROS項目が純粹に形質的な記述に終始しているのを嫌い、犀図 Pl. CCXXVII, Fig. 1. De Rhinoceros. (写真23)のみをイギリス原書から採用し、記事はウォイトを再録したようである。C.P. ツェンベリーから博物学を学んだ阿蘭陀通詞茂節右衛門が安永9年3月にボイスからの抄訳「和蘭陀本草志」(杏雨書屋所蔵)を著しているところから、ボイスの舶載は安永期に遡るが、桂川甫周は犀図を模写した天明2年の時点では、ボイスを入手していなかったにちがいない。

4. 犀説訳文の検討

犀説訳文とウォイト『医薬宝函』蘭訳第2版(1766)の犀RHINOCEROS項目の原文とを比較検討し、甫周の翻訳過程を解明しよう。訳文は漢訳を適切に区切って太字書体でかかげ、読み下しを添えることとする。

犀 利訥説魯私羅甸 涅烏思荷倫和蘭 二語翻鼻角

(犀 ^{リノセロスラテン} 利訥説魯私羅甸 ^{ネウスホルンオランダ} 涅烏思荷倫和蘭 二語鼻角と翻ず)

犀項目の見出し、RHINOCEROS, Neushoorn, Rhinosterに対応する。ウォイトの見出し語はすべてラテン語であり、その直後に対応するオランダ語を掲げる。甫周は犀を意味するオランダ語のNeushoornとRhinosterのうち、後者を省略している。「鼻角」はNeushoornの直訳とも考えられるが、甫周の独創ではない。南懷仁『坤輿外紀』は犀を「鼻角」とよび、その説明に「印度国^{カンバヤ}剛霸垂の地に獸を産す。鼻角と名づく。身長は象の如く、足は稍短し。遍体皆紅黃の斑点、鱗介あり。矢透る能わず。鼻上之一角、堅きこと鋼鉄の如し。將に象と闘わんとする時、則ち山石に其の角を磨し、象の腹を触して之を斃す」(原漢文)とある。南懷仁『坤輿全図』にはデューラー流の犀図(写真24, 25)の脇に「鼻角」の同じ説明が添えられている。この犀図は甫周の

犀図と同じく頭部が左向きである。甫周が『坤輿全図』を参照したかどうか、その手がかりは得られていない。『坤輿全図』の舶載例はこれまで報告されていないようだ¹⁸⁾。



写真24 南懐仁『坤輿全図』
左4幅
神戸市立博物館蔵



写真25 同 犀図 (拡大)

天明3年12月18日法眼に任ぜられ¹⁹⁾て以降の甫周の著作である「和蘭薬選」(京都大学富士川文庫本)には、「犀獸ノ鼻上二角アリテ其名ヲ鼻角獸ト云」とあり、「鼻角獸」に「犀蛮名匿鳥私火論、此語鼻角ト翻ス」との双行注を加えている。匿鳥私火論^{ネウスホルン}はオランダ語 Neushoorn の音訳である。

「鼻角」はまた天明期の阿蘭陀通詞の翻訳と推定される「シカットカームル ウラーイツ書和解」(個人蔵)では、以下のように犀角の訳語として使われている。これはウォイト『医薬宝函』蘭訳初版の CORNU RHINOCEROTIS 項目の翻訳である。

鼻角

コルニュー。リノセーロス 刺的印語

ニュース。ホールン 和蘭語

質堅重にして大なるハ長さ一エル(二尺二寸五歩当る)あり。外黒く或ハ灰色にして内白しといへども潔からず。形ち曲りて新月のごとく、本大く末尖れり。亜墨利加州リノセーロス(犀)といへる獸の鼻にあり。其獸大さ象のごとく力是に勝れり。是を以テオリハント。メーステル(象の師の義)と名く。常に象と戦ひ鼻角を以て象の鼻を刺す。主治同じき以て一角に代へ用う。古人以て飲食の器とす。

此物産亜弗利加州喜望峯地方及支那暹羅諸処山中、又能居水中

(此物は亜弗利加州喜望峯地方及び支那暹羅の諸処山中に産す。また能く水中に居す。)

産地として「亜弗利加州喜望峯地方」を挙げるのは、Men vindt het veel om en by de Kaap der goede Hoop（犀は喜望峰周辺に多く見られる）を踏まえている。「支那暹羅諸処山中、又能居水中」はオランダ語原文には対応箇所がない。『坤輿外紀』の「巨鳥異獸」項目で犀を「能く水中に居ること十日を数う」とする記述があり、これを参照したことは間違いないだろう。『和漢三才図会』では「山犀，水犀，兕犀の三種あり」「山犀は山林に居し人多く之を得，水犀は水中を出入して最も得難し」とある。『増補華夷通商考』では犀は雲南省の土産に，犀角は四川省，暹羅，^もら^か（マラッカ）の土産に挙がっている。

文化初年に山村才助が「新訳東西紀游」を抄訳するに用いたニューホフ『東西海陸紀行』J. Nieuhof, *Gedenkwaardige zee- en lantreise door de voornaemste landschappen van West en Oostindien*. Amsterdam, 1682. には象，犀，ライオン，火食鳥などを画き入れた見開きの銅版喜望峰近傍図 *Caerte vande Cabo de Bona Esperança en haer gelegentheynt daer omtrent*. (写真 26) がある。同じく才助が「訂正増訳采覧異言」や「西洋雜記」のために愛読したスハウテン『東インド紀行』W. Schouten, *Oost-indische Voyagie*. Amsterdam, 1676. pp. 124-125 にはベンガルの犀の記述がある。天明 2 年の時点では，甫周はこれらの蘭書を見る機会が無かったようである。

其形大亜象，褐色帶黒，全身無毛，皮甲甚堅，刀箭不能入，遠望之擲甲甚，脚甚大如着鱗甲
轆

(其形大なること象に^つ並ぐ。褐色にして黒を帯び全身毛無し。皮甲は甚だ堅く刀箭入る能わず。之を遠望すれば^よろ^い甲を^まと^と擲うこと甚だし。脚は甚だ大にして鱗甲の^たび^の轆を着するが如し。)

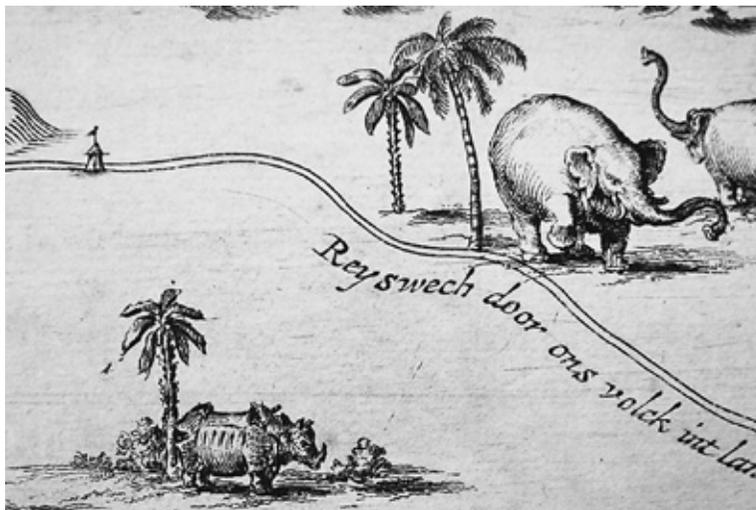


写真 26 ニューホフ『東西海陸紀行』「喜望峰近傍図」中 犀図 神戸市立博物館蔵

「其形大亜象」は is, naast den Oliphant, het grootste viervoetige Dier van de bekende Waereld, welk onde de *Amphibia*, en herkaauwende Dieren gerekend wordt (既知の世界では象に次いで最大の四足獣であり、両生類と反芻動物に数えられている) を縮約している。「褐色帯黒, 全身無毛, 皮甲甚堅, 刀箭不能入, 遠望之擲甲甚」は, Zyn huid is zonder haair, en ziet 'er van verre uit, als of 't enkel Schilden waren, schoon 't maar ruwheden van de borstels zyn; zy is donker, aschverwig van kleur, naar 't zwart trekkende, en even hard, als die van een Oliphant, zoo dat 'er de pylen op afstuiten. (膚は無毛で刷毛のように粗剛であるけれども遠方からはまるで盾のようにみえる。膚はくすみ, 灰色で黒みを帯びており, 象の膚とおなじぐらい堅く, 矢もはね返るほどである) の抄訳である。「脚甚大如着鱗甲韞」は De beenen zyn zeer dik, en schynen als in geschubde laarsen te hangen. (脚は大変太く, 鱗で覆われた長靴を履いたように垂れ下がって見える) に対応する。

其嘴似野猪而尖, 其食物也齧声類野猪, 故不遠聞

(其の嘴は野猪いのししに似て尖り, 其の物を食らうや齧声ちせいは野猪いのししに類す。故に遠くには聞こえず。)

Zyn muil is als die der Zwynen, maar veel spitzer; en 't gnort ook als een Verken, doch laat zich op geen verren afstand hooren. (口は猪の口に似ているが, より尖っている。豚のように鼻を鳴らす離れたところからは聞こえない) に対応する。動詞 gnorren は knorren と綴り, 猪や豚が餌を食べる際の鳴き声を表す。反芻を意味する「齧声ちせい」を用いたのは, 原文で犀を herkaauwende Dieren (反芻動物) の一つとしているのを受けているかもしれない。

甫周は草稿で「故不聞遠」と書き誤ったあと, 「故不遠聞」と訂正している (写真4参照)。

舌上有刺如鑷状, 每食棘刺

(舌上に刺あり鑷やすりの如き状なり。毎に棘刺ささまを食らう。)

「舌上有刺如鑷状」は met vylen voorziene tong (鑷やすりのような舌) を受けているが, 「每食棘刺」に対応する原文は見当たらない。

鼻上有一角甚堅确, 形如半月, 長二尺許, 或三四尺, 怒則直衝, 穿燥地飛砂石於身後

(鼻上に一角有り甚だ堅确ばかなり。形は半月の如く, 長さ二尺許り或いは三四尺。怒れば則ち直衝して燥地を穿ち, 砂石を身の後ろに飛ばす。)

この訳文全体が原文 *Dezelve is gewapend met een harden, sterken hoorn, van onderscheiden grootte, donker-groen van verwe, en als eene ploegschaar geboogen. Somtyds is 't wel 2 voeten lang. Als het dier vergramd is, graaft het daar mede steenen uit den grond, die het verre over zynen*

rug heen weet te slingeren. (武器として堅く強固な角を持っており、大きさは様々。暗緑色で鋤の刃のように曲がっている。長さ2フィートになることもある。この獣は怒ると角で地面から石を掘り出し、背後に放り投げる才がある)に対応する。

「形如半月」の形容は、als eene ploegschaar geboogen (鋤の刃のように曲がっている)が分かりにくかったため、蘭訳初版(1741)犀角 CORNU RHINOCEROTIS 項目の het is gekromt als een halve maan (半月のように曲がっている)を採用したように思われる。

甫周は草稿で「穿燥地砂石於身後飛」と書き誤ったあと、「穿燥地飛砂石於身後」と訂正している(写真4参照)。

百獸俱慴伏，尤憎象，偶值必逐与之鬪以角，触其腹而斃，故名象吏，言其制象猶吏之制罪人也，或云其將鬪也必加其角於石上而磨之

(百獸俱に^{おそ}慴れ伏す。尤も象を憎む。偶^{たまたま} 値えば必ず逐い、之と鬪うに角を以てす。其の腹を触して斃す。故に象吏と名づく。其の象を制すること猶お吏の罪人を制するがごときを言うなり。或は云う、其の將に鬪わんとするや必ず其の角を石上^おに加きて之を磨くと。)

「百獸俱慴伏」に対応するオランダ語原文は見当たらない。『坤輿外紀』の「巨鳥異獸」項目に「牛有り。大なること象の如し。両角を生ず。一は鼻上に在り、一は項背に在り。皮は鎧甲の如し。頭は大にして尾は短し。能く水中に居ること十日を数う。百獸俱に^{おそ}慴れ伏す。象と虎に値えば必ず逐いて之を殺す。骨肉皮角牙糞、皆薬と為す。西洋之を貴重す。」(原漢文)とある犀の記述の下線部を踏まえていることは明白である。「尤憎象，偶值必逐与之鬪以角，触其腹而斃」は Ook tast het, zoo het zyn doodlyken Vyand, den *Oliphant* niet kan te ontloopen, denzelven daarmede aan, en ryt hem somwylen 'er den buik mede op. (また不俱戴天の敵である象との出逢いが避けられないとなると、角を立てて象に襲いかかり、時に角でその腹を切り裂くことがある)を要約しているが、「必逐」との表現は『坤輿外紀』の記述を反映している。犀と象の戦いを画いた銅版画としては、17世紀オランダの銅版画家ロメイン・デ・ホーへの「アジア・アフリカの動物」Animaux d'Asie et d'Afrique (写真27)がある。



写真27 ロメイン・デ・ホーへ『東西インド図誌』 国際日本文化研究センター蔵

ロメイ・デ・ホーヘ『東西インド図誌』Romein de Hooge, *Les Indes Orientales et Occidentales, et autres lieux*. Leide, P. Vander Aa, ca.1710. 所取のもので、犀はデューラー風である。この銅版画集の江戸時代船載は確認できていない。

「故名象吏言、其制象猶吏之制罪人也」は蘭訳初版（1741）犀角 CORNU RHINOCEROTIS 項目の蘭文 dit dier is by na zo groot als een Oliphant, het word ook genoemt Oliphant-meester, om dat het met zyn hoorn den buik van den Oliphant open scheurt, en op deze wyze meester van den zelve is, (この獣はほぼ象と同じほどの大きさがあり、象の支配者と呼ばれている。その角で象の腹を突き破り、そうやって象を制するからである) のなかに見られる Oliphant-meester を「象吏」と訳し、甫周が独自に獄吏の例えを用いて説明したものである。

「象吏」の訳語は、甫周が蘭訳第2版（1766）の犀角 CORNU RHINOCEROTIS 項目ではなく、初版の当該項目を使用したことの証左となっている。両版の項目を比較すると、第2版では末尾に Zie voorts op *Rhinoceros* リノセロス項目参照) の語句が付け加えられているのを除けば、ほぼ初版と同文であるが、問題の箇所は、(...) een Dier dat *Rhinoceros* genoemt word in *West-Indië*, en welk by na zo groot is, als een Oliphant, en ook deszelfs meester geheeten wordt (西インドでリノセロスと呼ばれている獣……これはほぼ象と同じほどの大きさがあり、その支配者と言われている) となっており、Oliphant-meester の表現を欠くからである。

「或云其将闘也必加其角於石上而磨之」に対応するオランダ語原文はない。先に引用した『坤輿外紀』「鼻角」項目の「将に象と闘わんとする時、則ち山石に其の角を磨し、象の腹を触して之を斃す」(原漢文) に依拠していることは明かである。同様の表現は森島中良『万国新話』(寛政元年刊) の「犀象と闘ふ」(巻四) 記事中、次の下線部にも見える(振り仮名は原本のまま)。

「ヨハンブラア」が万国図説に曰。此国の象きはめて大にして能人に馴^{なる}。戦闘^{たゝかひ}にハ殊に象を用ゆまた犀を産す。性はなはだ象を憎む。小なるものと雖^{いへとも}また能象^{たゝか}と闘ふ。其^{まさ}将^{まさ}に闘^まはんとする時ハ石上にて角を磨^{とき}。象の腹を突破て殺すとそ。犀ハ大^つ大^つ象に重^つぐものなり。其形状主治ハ。伯氏著す所の和蘭葉選に見えたり。

「伯氏」すなわち甫周の「和蘭葉選」に犀の「形状主治」を載せるというが、富士川文庫本の「和蘭葉選」には不完全な写本のためか、犀または犀角の項目は見当たらない。「ヨハンブラア」の「万国図説」といえば、桂川甫周がヨハン・ブラウ『新世界地全図』J. Blaeu, *Nova Totius Terrarum Orbis Tabula*. Amsterdam, ca 1648. (東京国立博物館蔵) の下部にある「地球の区分、形態、特性の摘解」Korte Verklaring der afdeyling, gestaltenis, ende eyenschappen des Aerdtbodems を翻訳した「新製地毯万国図説」(明治大学図書館 蘆田文庫所蔵, 天明6年成) を想起させるが、犀の記事は原文にも翻訳にも含まれない²⁰⁾。

本木家旧蔵の「万国図説」(長崎歴史文化博物館所蔵, 本木良永・松村元綱共訳) は上述のように『職方外紀』の翻訳であり、ブラウとは無関係である。その「印第第」記事に次の訳文が見

える（句読点，平仮名ルビは私に付けた）。『万国新話』の「此国の象きはめて大にして能人になる馴」は下記の下線部に対応するが，他の部分は関連がみとめられない。森島中良が典拠にあげた「万国図説」は正体不明である。「ヨハンブラア」は何かの誤りであろう。なお，下記引用の末尾の「罷達」は犀を意味するポルトガル語 bada の音訳であろう。□は虫損を示す。

多ク象ヲ産ス。コノ象侏国ノ象ニ異ナリ，ヨク人ノ言ヲシル。或ハ命シテ物ヲ負セテ
某ノ地ニ至レトイヘバ，輒チユキテ爽たがフコトナシ。モシ侏国ノ象コノ象ヲミレハ蹲リ
 伏シテコレヲ恐ル。（中略）又一ノ獸アリ。形牛ノ如ク身ノ大サ象ノ如シ。其長ケ少
 シク低シ。兩角アリ。一ツハ鼻上ニアリ。一ハ頂背ノ間ニアリ。全身ノ皮甲甚タ堅
 シ。□銃モ入ルコト能ハス。ソノ甲交スル所鱗比シテ鎧甲ニ似タリ。其堅キコト鯨
 皮ノ如シ。頭ハ大ニシテ鼻短シ。小サキヨリ養カヘバヨク馴ル。百獸ヲ摺レ伏ス。尤モ象
 ト馬トヲ憎ム。若ニ物ニ偶ヘハ逐テ殺ス。其骨モ肉モ皮角牙蹄，其糞ニ至ルマテ，皆
 藥ニ用ユ。西方ノ諸国ミナコレヲ貴重ス。名テ罷達ト云。

又項上有一角長六七寸，耳目俱小且常瞪視，頸不能回，如人偶之就其左右，却行則遂不見
 （項上に一角有り，長さ六七寸。耳目俱に小さく且つ常に瞪視す。頸は能く回らず。如し人
 之あに偶い其の左右に就くも，却行すれば則ち遂に見えず。）

この訳文は原文 Aan deszelfs voorhoofd groeit nog een andere hoorn, die meer dan zes duimen uitsteekt; en de gedaante heeft van een halven omgekeerden kogel. De Ooren en Oogen zyn klein, en met de laatste ziet hy enkel regt uit, zoo dat men door zydelings af te gaan, zyne nadering ontwyken kan; dewyl het zich zeer bezwaarlyk kan omdraaijen.（額にはもうひとつ角が生えている。それは6インチ以上突き出ており，弾丸の半分を逆さにした形をしている。耳と目は小さく，目で前ばかり見ている。そのため人は脇に反れることでその接近を避けることができる。相手は体を回すことが大変難しいからである。）の抄訳である。原文の意味が正確には捉えられていない。瞪視は目をいっぱい広げて見る，意。甫周の画いた犀の目はまさに瞪視している。

性不害人類，但憎赤色，如值服赤衣者必怒殺之，以刺舌舐其肉，盡之及骨，其暴惡如此
 （性，人類を害せず。但し，赤色を憎む。如し赤衣を服する者に値あえば，必ず怒りて之を殺す。刺舌を以て其の肉を舐め，之を盡すこと骨に及ぶ。其の暴悪なること此の如し。）

この訳文は原文 doch 't zal geen Mensch, ten zy getergd, eenig leed doen. De roode kleur zou, volgens sommigen, zeer by 't zelve gezocht zyn; waarom het de gene, die dus gekleed zyn, ongenadig aantasten zou en vernielen, lekkende door zyn scherpe en als met vylen voorziene tong, het vleesch wel haast geheel van de beenen af.（苛立たせないかぎり人に危害は加えない。一説によ

れば自身赤色を大変好む。そのため赤い服をきた人を容赦なく襲い殺し、鋭く鑢のような舌を用いて肉を骨から、たちまちのうちに、すっかり舐め取ってしまうという。)に対応する。ただし、「其暴悪如此」は甫周の追加である。

体有異香甚烈，認其香而求之必得其所居也

(体に異香有り，甚だ烈し。其の香を認めて之を求むれば必ず其の居所を得るなり。)

原文 *Ongemeen scherp is de reuk van dit Dier; en 't weet daar door zynen roof gereedlyk te vinden.* (この獣の嗅覚は非常に鋭い。それによって獲物をすぐさま見つけることができる。)の誤訳となっている。*zynen roof* (その獲物)を「其所居」と誤解した事情は分からない。

角蹄血皆薬也，西洋貴重之

(角，蹄，血，皆薬也。西洋之を貴重す。)

『坤輿外紀』の「巨鳥異獸」項目の「骨肉皮角牙糞，皆薬と為す。西洋之を貴重す」を踏まえ、原文 *In de Geneeskunde gebruikt men zyne horens, nagels en bloed, als vergift weêrstaande, zweetverwekkende, en in buikloopen.* (医術では角と蹄と血が解毒剤，発汗剤，下痢止めとして用いられている)の示す薬種としての角，蹄，血を採用しているが，薬効(解毒，発汗，下痢止め)は省略している。

これは甫周がここでは博物誌的な興味の方が強く，薬効への関心は薄かったためであろう。薬効に関連する原文 *Doch wy kunnen deese middelen zeer wel missen: en in Asia en Africa zyn ook andere Medicynen genoeg om aan die oogmerken van geneezing te beantwoorden.* (しかし，我々がこれらの薬剤を手に入れるのは大変難しい。アジアやアフリカでも，そうした医療目的にかなう他の薬剤がある)は無視されている。また，蘭訳初版の犀角項目の薬効記事 *deze hoorn komt in krachten met den Eenhoorn by na overeen, het word ook zomtyds in deszelfs plaats gebruikt. Men maakt daaruit ook beekers en kommetjes, en men zegt dat zommige zig voor 't vergif als ze hier uit drinken zoeken te bevryden, edoch zodanige moeten al een zeer sterk geloof hebben.* (この角は効能の点で一角とほぼ一致しており，ときどきその代わりに用いられる。またこれから碗や小皿が作られる。それらで飲んで毒から身を守ろうとするものがあるというが，そうした人は頑固な迷信家にちがいない。)もおそらく同じ理由から利用されていない。

前章で見たように，「蘭腕摘芳」筆録本巻一に収録された甫周の犀説の末尾は「角の功用は一角に類す，之を代用して可なり，主治，消毒発汗，下利を止む，或は攻して器皿と為さば中毒の患無しと云う」(原漢文)と効能を記しているが，この初版の薬効記事の要約である。「蘭腕摘芳」収録の犀説の方が下訳に近く，甫周は「加歩」を削除するなど修正を加え，薬効記事を省略した草稿(写真4)を作成した上で，犀図に書き入れたと考えられる。

おわりに

蘭学の勃興した安永天明期に舶載された西洋博物書や百科事典の中で、犀の記事を図入りで載せるものは、プリニウス『五卷本博物誌』（1662）、ヨンストン『動物図譜』（1660）、ボイス『新修学芸百科辞典』第9巻（1777）のみであった。図はいずれもデューラーの犀図を源流とするものであった。安永期から長崎の阿蘭陀通詞仲間で流通していたプリニウスの原書が江戸にもたらされた形跡はない。天明2年の段階では、ボイスは江戸の蘭学者には知られていなかったようである。

蘭学の発展期にあたる化政期には、デューラー流の犀図によらず、犀の実写図を載せた博物書が舶載された。ビュフォン『博物誌』オランダ語版である。その第11巻（1779）第VII図‘Le Rhinoceros’は、1767年頃パリの王立動物園で生きていた雌の犀を描いた銅版図版である。第16巻（1785）第I図‘LE RHINOCEROS DU CAP’は、オランダ人探検家ゴードン R.J. Gordon（1743-1795）がケープのガムカ Gamka 河源流で狩猟した犀の図である。桂川甫周の孫にあたる甫賢がビュフォン蘭訳の麝香猫図を模写しているが、これらの犀図の日本への影響はいまのところ確認できていない。

安永天明期の蘭学者が薬物学的あるいは博物学的な知識を得るために利用したのは、長崎の阿蘭陀通詞仲間でレキシコンと呼ばれて重宝されていた、ウォイト『医薬宝函』であった。甫周はその第2版の RHINOCEROS 項目の博物誌的な記述を中心にすえ、初版の犀角 CORNU RHINOCEROTIS 項目の博物誌情報も加えて、翻訳をすすめた。甫周のオランダ語解読能力は当時の蘭学者としては高かったが、前野良沢が長崎から江戸にもたらした訳読方式、すなわちオランダ語の単語一語一語に、漢語を当てて漢文式に読み下す方式（良沢のいう「蘭化亭訳文式」）によっていた。

翻訳に当たって、『坤輿外紀』を参照したことは、当時の流行によっていたと考えられる。『坤輿外紀』や『職方外紀』は海外文物の参考書として安永天明期の長崎で、松村元綱ら阿蘭陀通詞が熱心に読み、その流行が江戸にも及んだようである。松村は本木良永と協力して、おそらく安永年間に『職方外紀』の訳本「万国図説」を作っている。天明7年、林子平は桂川甫周所蔵の『職方外紀』を得て、兄友諒、その子の友通、友次、友郷兄弟、さらには藤塚知明の末子元吉までも動員して、その写本を作成し蔵書としている。

オランダ語の文法知識の欠如を漢文の読解力で補わざるを得なかった勃興期の蘭学者は、儒医の教養を共通に持っており、漢籍情報は親しみやすく、正式な文章は漢文とする伝統が確立していた。漢蘭の両方に通じることが彼らの知の理想であったといえよう。

海外の文物を収集することは、本草薬品会を通じて研究交流をすすめるという学術的側面と同時に、詩文書画のサロン文化を維持発展させるという社会的側面もあったのである。桂川甫周訳并模犀図はこの両側面から、さらに検討を要する。すなわち、江戸、京都、大坂、尾張、伊勢、岸和田など本草博物誌の盛んであった各地の物産会、薬品会関係資料によって、犀など海外異獣の展示例を精査し、地域間の情報ネットワークを解明することが今後の課題である。そのための

好資料として、文化5年から慶応3年にいたる「読書室物産会目録」全50号49冊がある。

後 記

本稿の成るについては、山本読書室当主・山本和彦様、愛日教育会会長・出崎俊雄様、資料所蔵機関関係者の皆様にご大変お世話になりました。記して謝意を表します。

(2014年3月31日投稿)

注

- 1) 松田清編『山本読書室資料仮目録 統合電子版』(2014年3月10日)において整理番号2710「犀図 桂川甫周訳并模」として記載。
- 2) 佐々木克・藤井譲治・三澤純・谷川穰編『岩倉具視関係史料 上』思文閣出版, 2012, p. 96に翻刻あり。
- 3) 今泉源吉『蘭学の家桂川の人々』篠崎書林, 1965, p. 459.
- 4) 今泉源吉, 前掲書, pp. 246-247.
- 5) 『愛日文庫目録』大阪市愛日小学校, 1986, p. 46, 洋書175番。
- 6) https://www.britishmuseum.org/explore/highlights/highlight_image.aspx?image=ps090470.jpg&retpage=21369 参照。2014年3月28日閲覧。
- 7) 勝盛典子『近世異国趣味美術の史的研究』図版p. 24, p. 45. 谷文晁の犀図については『平賀源内展』東京新聞, 2003, p. 118に掲載の写真も参照。
- 8) 桂川甫賢模写「麝」図(杏雨書屋蔵)の原図は, De Buffon, *De algemeene en byzondere natuurlyke historie*. 17de deel. Amsterdam, 1785. Plaat XXII, 'LE MUSC'. である。今泉源吉, 前掲書, p. 464に写真掲載の「桂川の遺品」「洋書挿絵写生図」(2)はこの原図を甫賢が模写したものと認められる。
- 9) 磯崎康彦『江戸時代の蘭画と蘭書——近世日蘭比較美術史——』上巻, ゆまに書房, 2004, p. 665に写真入りで紹介されている藤正範写「犀」図(所蔵先の記載を欠く)は, 山本読書室資料の桂川甫周訳并模犀図と酷似しており, 漢訳の犀説本文も同文である。ただし, 末尾は「大日本天明二年歳次壬寅夏五月乙巳 侍御医桂川甫周世民訳并模」ではなく, 「大日本天明二年歳次壬寅夏五月乙巳 文化九年壬申夏四月甲辰藤正範写」となっている。「藤正範が, 犀の事柄や姿を天明二年(一七八二)に知ったにもかかわらず, その時すぐに描かず, 三〇年も経た文化九年(一八一二)に犀図を写しとったのである」との磯崎の説明は修正されなければならない。
- 10) 南懐仁『坤輿全図』(康熙13年, 1674, 神戸市立博物館所蔵南波コレクション)に配せられた異国珍獣図の説明文は『坤輿外紀』と重なる。『坤輿全図』重刊本(咸豊10年)については早稲田大学所蔵本の画像 http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ru11/ru11_00790/ru11_00790_0002/ru11_00790_0002.html を参照(2014年3月23日閲覧)。
- 11) 藤塚知明が林子平から恐らく長崎土産として入手した写本として, 他に「坤輿外紀」(安永4年長崎旅館での写本), ディリキウス『ケレイキスブック』(1689), フェレンティン『新田東インド誌』(1724-1726)などから抄写した「西洋奇図」, 松村元綱原著「東航和蘭海路記」がある。いずれも仙台市博物館藤塚家資料。
- 12) 東京国立博物館蔵。「犀牙」の記事は図賛として書かれたものようであるが図は欠けている。
- 13) 「斯突都兒」はこのとき「風鳥」の「雌雄三四翅」も江戸にもたらしたという(「蘭畹摘芳」筆

録本，卷四)。

- 14) [G 300 aa] Bref till C.P. Thunberg XXXI Stickman-Sönnnerberg, Uppsala University Library. Joh. Arnoldt Stützer, No. 12. [Batavia], 24 januarij, 1789. このスウェーデン語書簡については、ウプサラ大学マリー・クリスチーナ・スキュンケ Christine-Marie Skuncke 教授が松田に教示されたフランス語訳を参照した。
- 15) 内藤尚賢と同じく京都の以文会メンバーであった蘭学者の辻蘭室(1756-1835)は「亜細亜大州全図 和蘭鏤版」を詳述し、「下辺ニ白ク画ケル」「利末(ママ)垂ノトコロニ画セル禽獸ハ駄鳥獅子虎象犀等ノモノナリ」「鏤版ノ年記ヲ見ズ」と記している。京都大学附属図書館所蔵辻蘭室文書 [I/B/(1)] 参照。内藤尚賢や原在明は辻蘭室からボイス百科事典などの蘭学情報を得た可能性がある。
- 16) 松田清『洋学の書誌的研究』臨川書店，1989，pp. 619-622.
- 17) 杏雨書屋所蔵本(研究 1220, 京都江馬家旧蔵本)を使用した。
- 18) 神戸市立博物館所蔵南波コレクション『坤輿全図』の伝来情報の探求が望まれる。杏雨書屋所蔵『坤輿外記』(貴 150, 宇田川榕菴旧蔵写本)の犀図は背景をのぞき『坤輿全図』の犀図と近似しており、『坤輿全図』受容に関する重要な史料である。
- 19) 今泉源吉，前掲書，p. 247.
- 20) 「桂川甫周訳・大概玄沢校新製地毬万国図説(翻刻)」明治大学人文科学研究所紀要第 51 冊(2002) 所収，参照。

補注(1) 稲垣子猷訳『坤輿全図説』(享和 2 年跋，彫工洞津正木堂伝右衛門)所掲の「犀」図はヨンストン『動物図譜』からの初期の模刻として注目されるが，掲載の経緯は不明である。

補注(2) 本稿校正中に，桂川甫周自筆とは認めがたいが，「故名象吏，言其制象猶吏之制罪人也」を欠くなど若干の相違があるものの，甫周訳犀説の初稿と思われるものを配した犀図(個人蔵，下図参照)が出現した。訳文の末尾「西洋最貴重之」のあとに，「鼻角獸図，載在勇斯東私禽獸譜図，僅数寸今排之」と記しており，ヨンストン『動物図譜』から直接模写したことが分かる。



「珍禽獸図巻」中 犀図(本紙 295×289mm) 個人蔵